

〔巻頭言〕

## 「足るを知る」のは難しい

岩 村 祥 吉

先日、テレビだったかラジオだったかで、「足るを知る（知足）」という言葉を見ました。始めに聞いたときには、その言葉について何となく分かるような気がして、「なるほど、自分のおかれている立場や状況について適当なところで妥協して、高望みをしてはいけないということなんだ。そこそこ、出来ればそれでいいんだ。ほどほどでいいってことだな。」というように受け止めました。

ちょうど、ここに文章を書くよう事務局からご依頼を受けていまして、何を書いたらいいのかと考えていましたので、インターネットでちょっと検索しました。ご存じの方も多くいらっしゃることは思いますし、インターネットでの検索結果ではありますが、その一端を紹介させていただきます。「足るを知る」とは仏教の教えで、人間の願い（欲望）にはきりがなく、その願い（欲望）がかなった瞬間は満足しても、その満足は長続きはせず、次の欲望がわいてくる。生きている限り欲望はつきることがなく、なくすことはできないので、欲望をなるがままに肥大化させるのではなく、正しくコントロールして「足るを知る」なかに幸せを見つけるといことが書かれていました。昨年、世間を騒がした食品に関連する多くの偽装事件は、まさしく「足るを知る」ことができなかった例の最たるものですが、金儲けだけを目的とするついつい自分の立っている場所を見失うので

しょうか。

しかし、知足とはただ単に欲望を抑えてほどほどのところで現状に妥協するという消極的なことではなく、積極的に足るを知って、真の満足を求めるとわかる人にはわかってもらえるということのようです。京セラ会長時代の稲盛和夫さんが、10年以上前に環境と経済に関連して「使い捨て」でない「足るを知る」経済について語られているページも拝見できました。「産業革命により経済は大きく発展し、科学も著しい発展を遂げた。その結果、資源の消費は際限なく拡大し、環境問題や食糧問題を起こしている。経済が際限なく拡大することはないと漠然とはわかっているが、経済成長が社会システムに組み込まれていることについて変えることはできないとの思い込みもある。しかし、マクロでは拡大はしないが、ミクロではダイナミックなことが起き、発展していく「足るを知る」経済がある。たとえば、環境を守ることは経済を萎縮させるのではなく、環境を改善する産業により経済を活性化できる。大量生産、大量消費が経済のパイを大きくするという信仰は見直すべきである。」という内容でした。

「足るを知る」を養豚に当てはめるとどうでしょうか。生産一辺倒で、飼養密度を無視した詰め込み型では、衛生対策ができないためにかえって生産性に破綻を来す。適度な密度で、適切な衛生管

理を行うことにより、生産性も確保できるし、また、規模にあった環境対策により、社会的にも認められる「足るを知る」養豚があるのかもしれませんが。これはある意味「動物福祉」にもつながる部分でもあります。もちろん生産行為ですから、規模拡大を否定することはできませんが、その際にも「足るを知る」をもとに拡大規模を探ることもできるのではないのでしょうか。豚肉の自給率を現在の50%から73%に上げるためには、生産

性の向上を図る必要がありますが、種々の技術を組み合わせて「足るを知る」生産性向上というものがあればと思います。

翻って、私自身のことですが、やはりおいしいものを食べたいし、楽しいこともしたい、いい車にも乗りたいし、広い家にも住みたいと欲のかたまりです。どうも「足るを知る」は難しいようです。